

日本応用心理学会公開シンポジウム

異文化対立から相互理解へ：理解と和解のためのフロンティア

企画 内藤 哲雄（信州大学）
司会 伊藤 武彦（和光大学）
内藤 哲雄（信州大学）
話題提供者 井上 孝代（明治学院大学）
伊藤 哲司（茨城大学）
指定討論者 大 淵 憲一（東北大学）

このシンポジウムは、平成19年11月17日（土）午後1時30分～午後4時20分
に東京富士大学で開催された。



■司会者による開会宣言と構成員及び企画内容の紹介

伊藤（武）：ただいまより、日本応用心理学会公開シンポジウム「異文化対立から相互理解へ：理解と和解のためのフロンティア」を開催します。本シンポジウムの話題提供の先生方は2名で、いずれも異文化間の葛藤・対立とその改善のための実践活動と研究に取り組まれています。井上孝代先生は留学生を中心とした異文化間カウンセリングに関して豊富な経験をお持ちで多文化間の教育や臨床の専門家として著名です。また、伊藤哲司先生は、アフリカやアジアでのフィールド研究、近年ではベトナムや韓国をフィールドとした実践研究に取り組まれており、「現場心理学」の第一線研究者としてよく知られています。また、指定討論者の大淵憲一先生は、攻撃行動や犯罪行動の専門家として著名ですが、異文

化間対人葛藤の調査研究にも取り組まれています。実験室での緻密な条件操作に重きを置く実験社会心理学と、フィールドでの複合的・統合的な効果を重視する応用心理学的な研究との両者の観点からコメントをしていただけるものと考えております。

それではまず企画のまとめ役を担当された内藤哲雄先生に、本シンポジウムの企画趣旨についての説明をお願いしたいと思います。

内藤：ありとあらゆる物資・情報・人の交流が地球規模で行われている現代社会での日常生活を考えると、国際化、国家間対立と協調、多民族間の紛争と共生、異文化対立と理解は、応用心理学の実践・研究課題として欠くことができないといえます。内藤個人としても、勤務先で留学生センター長を二期4年併任したこと、南山大学の佐々木陽子先生代表の科学研究費「紛争地に於ける平和構築のた

めのストラテジー調査のためのPAC分析の活用」で共同研究者として助成を受けたことから、関心を持続けるようになった課題です。民族紛争の調査地点はイスラエル・パレスチナ地域で、私の渡航計画の直前に銃撃戦があり私自身は訪ねることができなかったことから、宿題のような思いが残っています。

企画を具体化して行くにあたっては、平和研究にかなり以前から取り組まれ、異文化理解の研修として学生を連れて韓国に何度も行かれていた伊藤武彦先生に加わっていただきました。シンポジウムの趣旨は、「国際間での、歴史や文化の対立を超えて理解と和解を実現するための、応用心理学での最前線の実践を取り上げる」に絞り込むことにしました。この企画趣旨に沿った人選と話題については、井上孝代先生の、日本を含むアジア太平洋諸国の青年が同乗した「世界青年の船」でのトラブルのカウンセリングと和解の儀式を実施したものと、伊藤哲司先生の、日韓の青年が日韓の映画を見て話し合いながら相互理解を実現した二つを取り上げることにしました。ついで、指定討論者は大淵憲一先生にお願いし、司会は伊藤武彦先生と私内藤哲雄が担当することになりました。



■話題提供者の報告内容

司会：伊藤武彦

それでは話題提供の先生方の報告に移りたいと思います。まず最初は井上先生に、「世界青年の船」への参加者の異文化対立と相互理解についてのお話しをお願いします。

『世界青年の船』への参加者の 異文化対立と相互理解

井上孝代

(明治学院大学)

はじめまして、明治学院大学の井上と申します。

今日は本シンポジウムの企画趣旨である、国際間での歴史や文化の対立を超えて理解と和解を実現するための応用心理学での実践例として、『世界青年の船』（総務省、1999）における参加者たちのコンフリクト解決に向けたカウンセリング活動の経験について、同乗指導官（カウンセラー）の立場から報告させていただきたいと思います。

1. 『世界青年の船』事業の概要

まず、『世界青年の船』事業について説明させていただきます。この事業の趣旨としては、(1) 青年たちが船上の生活を共にし、世界的視点で共通の課題の研究・討論を行い、船内及び訪問国において各種の国際交流活動を行う、(2) 友好と理解を促進し、国際的視野を広げ、国際協力精神の涵養と国際協力における実践力の向上を図り、これをもって、国際化の進展する社会の各分野で指導性を発揮できる青年の育成に資するとともに、青少年健全育成活動に参加青年が寄与する、大きくはこの2点を目的とするものです。

報告者が乗船した第11回「世界青年の船」事業の概要ですが、スローガンとして“Celebrating Diversity, Spirit of Tomorrow”（違いを喜び合おう、明日への希望）を掲げ、1999年1月19日～3月16日にかけて運行されました。参加国はオーストラリア、カナダ、エクアドル、フィジー、日本、メキシコ、ニュージーランド、ペルー、ソロモン、トンガ、米国、ウルグアイ、ベネズエラの13カ国で、日本人120名に海外の国々から13名ずつ、合計276名の20代の青年たちがソロモン、トンガ、タヒチ、エクアドル、メキシコ、米国（合計6カ国）を訪問しながら交流活動を行いました。活動単位としては13グループ（各グループ9-22名）に組織（国籍、年齢、職業など偏りなし）、グループ・（ナショナル）リーダーが1名、アシスタント・グループ・リーダー4名（日本青年2名、外国青年2名）

でした。船内研修としては、①団長講話（活動指針）、②統括講義（振り返り）、③セミナー、団長・指導官の専門分野、個々の興味・関心に応じ4つ受講後にレポートを提出、④総括セミナー（パネル・ディスカッション、自主講座）、⑤グループ別研修（相互交流活動）、⑥ディスカッション（意見交換）が綿密にスケジュールに組み込まれ、異なる専門を有する指導官による講義形式、実験やディスカッションを取り入れた受講者参加型のものも多く、国際的視野を広め意見交換の場の重要な機会が用意されていました。第11回船のテーマは、指導官の専門性に応じ、①集団過程によるリーダーシップの発達と自己の気づき、②国連改革、③紛争解決の臨床心理学（井上担当）、④文化間気づきの発達、⑤グローバル化と相互依存と国際協力・共存の必要性の5つでした。

2. 異文化体験による青年の抱えるコンフリクト

このように事前研修を経て周到に準備されたプログラムですが、いざ実際に乗船してみると青年たちは大小に亘るコンフリクトを体験していききました。個人的にカウンセリング希望をしてくる青年も出てきましたし、シェアする船室内、グループ間、国別、地域別といったさまざまなレベルでのコンフリクトが認められたのです。

たとえば、個人的ケースについては、混乗船という特殊な環境になじまず摂食障害や睡眠障害といった身体症状を呈することも少なくありませんでした。異なる文化的背景のメンバー4名が船室を共有していましたが、プライバシーや性に対する考え方の違いから強いコンフリクトを訴えるケースも多く見られました。また、各グループはさまざまな国々からの参加者により構成されていましたが、ディスカッションやプレゼンテーションの仕方、自己表現・自己主張の仕方などが国によって異なり、グループ活動プロセスにはいろいろなコンフリクトが生起し、時に指導官やカウンセラーの介入が求められることも少なくありませんでした。

国別のコンフリクトとして印象に残ったのは国旗の取り扱い方をめぐる対立でした。船上では毎朝、ある1カ国の国旗掲揚と国家斉唱がなされるのですが、国によっては国旗が国の象徴であるとの意識が強く、国旗にそれほどの意義を感じない日本人青

年と対立を起こしてしまったのです。国旗の掲げ方が粗雑であった、たたみ方が雑であったなどとして、国際的対立を生んでしまったのです。

地域別のコンフリクトとしては、アジア地域とアメリカ・カナダ地域、ラテン地域といったくくりで文化摩擦が生じました。とくに船上のコミュニケーションは英語が共通語であったことで日本人などは一歩も二歩も引いてしまい、うまくコミュニケーションがとれないことがいくつものコンフリクトを起こさせることになったようです。ラテン文化圏のコミュニケーションスタイルはアジア圏とくに日本人には当初馴染みがなく困惑状態でした。時間や規則の遵守という点でも地域差が顕在し、遅刻をめぐるコンフリクトは長く存在しました。政治的視点から、本プログラムの趣旨としての国際平和をめぐる価値観・世界観の対立が明らかになり、時に強烈な議論が噴出したりしました。

これらのコンフリクトは青年たちの出身国の文化的・歴史的差異からもたらされることも多く、さらに青年期という発達の段階に特徴的な心性として、しばしば二局的・感情的対立状態を引き起こすことにもなり、その解決にあたっては、単なる一对一のカウンセリングのみならず文化摩擦の解決・和解といったマイクロレベルからマクロレベルまでの包括的な介入が必要でした。

3. 異文化間コンフリクトの解決事例

(1) PAC分析に見られる青年Aの事例

文化的コンフリクトは参加青年にとって決してマイナスの経験にとどまらず、やがてそれを乗り越えて新たな自己の気づきに至ったケースも少なくありませんでした。ここに短期的カウンセリングをおこなったケースについて、乗船後まもなくと下船時のPAC分析^{註1)}に基づき紹介したいと思います。なお、この事例については本人から開示の承諾を得ています。

事例Aの乗船後まもなくと下船時のPAC分析を、〈あなたにとっての（船の）異文化体験〉という刺激語を用いて実施しました。

【事例AのPAC分析（乗船後まもなく）からみた心理的状況】

本人は4つのイメージを自分にとっての異文化体験として、「ためらい」と「開放的な気分」は、（船

内の異文化接触活動への感情的反応) というイメージ、そして、「異文化交流のマイナス面」と「学生時代のイメージ」は、(自己への気づき) というイメージとしてあげました。「ためらい」と「開放的な気分」という一見相反する心理状態、すなわち一般的な異文化イメージが欧米中心のステレオタイプの偏った表面的イメージであったものが、船内の異文化接触活動によって、一方では「開放的な気分」を味わいながらも、大きく自己のコンプレックスやステレオタイプの修正を求められるといった心理的狀況があったのだと思われます。また、「自己への気づき」は、自分の「核」を形作った家庭・教育環境として話してくれたことが、そのことを示しています。いわば、自己の価値観といった核心の部分に触れるといった心理的狀況を表しています。この PAC 分析をおこなったのは、乗船して 10 日目の時点です。本人は、世界船へは本人の意思ではなく、企業研修の一環として乗船したこともあり、多くの文化の異なる青年たちとの船内活動を通して関わり大きなカルチャーショックを受け、それに伴う自己認識の変化を経験したと考えられます。

【事例 A の PAC 分析(下船時)から見た心理的狀況】

「友人」としての交流体験が表現しあうこと(コミュニケーションすること)の楽しさにつながり、やがて当初持っていた語学コンプレックスを超越し、〈異文化を吸収したい願望〉、〈異文化の人とも友

人になれるという自信〉というイメージにつながっていったことが示されました。すなわち、乗船経験による心理的变化としては、乗船直後は、異文化交流活動が自分自身のコンプレックスを浮かび上がらせ、そこにそれまでの家庭教育や学校教育のあり方や自己の関わり方への内省を生むという異文化接触下におけるショック状態を示しました。下船直前に認められた心理としては、本人の異文化理解への自信と意欲でした。このような心理的变化をもたらした要因としては、「乗船前の知識やイメージの変化」、「人間関係の変化」、「船内活動」、「自信と自己肯定感」といった因子が考えられます。自己の肯定感や自信、人間関係の広がりや深まりが生じたと考えられます。

(2) 日本人参加青年全体の乗船経験による変化

日本人の参加青年全員を対象とする最終プログラムの 1 日がかりの「体験振り返りワークショップ」において、KJ 法を応用したグループアプローチを実施し、参加青年たちが異文化体験の意義をどのようにとらえているかを調べてみました。

ワークショップの実施にあたっては、事前に、報告者と実施担当者であるナショナル・リーダー 2 名と目的、質問項目、実施方法についての打ち合わせをおこないました。〈ふり振り返り質問項目〉としては、①船内で最も楽しかったことは？そしてその



理由, ②最も印象に残っている OPY (外国人参加者) 1 人とその理由, ③最も印象に残った参加国とその理由, ④この異文化経験から学んだことは何ですか? ⑤異文化理解をする上で最も役立った経験は何ですか? ⑥異文化理解をする上で最も必要だと思うものは何ですか? ⑦下船してから新たに始めようと思っていることは何ですか? ⑧この異文化経験を通じて今日本について思うことは何ですか? ⑨この異文化経験を通じて今国際社会について考えていることは何ですか? ⑩下船後, 誰に何を伝えたいですか? 誰に? 何を? の 10 項目でした。

以上の集団的 KJ に準じたふり返りの結果, 3 点が得られました。①「この異文化経験から学んだこと?」: 第 1 に人間の根底は同じであり理解しあえる, 第 2 に偏見を乗り越え個性は尊重されるべきものであると確認しあった。同時に日本人としての自己の見直しという視点, 理解しあうためのコミュニケーションの重要性と“Celebrating Diversity”を明確に理解しえた。②「異文化理解をする上で最も役立った経験は?」: “乗船前の知識や体験の重要性”と実際に文化的背景の異なる参加青年たちとの“衣食住・活動を共にする重要性”を実感した。③「異文化理解に最も必要なもの」については, とくに“自己理解”, “自己表現”という項目がシェアリングのときの話題となった。“異文化に触れるということは, 自分自身の内面に触れること”であったという共通した実体験が語られました。これらの 3 項目に共通する視点としては, 異文化経験に伴う自己認識に関するものでした。文化的背景の異なる青年たち同士が活動を共にすることで違いに触れ, 自己への気づきが深まり, そのことが, 他の個性を認めようとする意識につながっていったと考えられます。

4. 包括的カウンセリング活動による働きかけの必要性

船上における文化的コンフリクトへの介入に求められたのは, 互いに文化的背景の異なる青年同士を相互関係へ導くような発達の・包括的アプローチでした。それには, ①相互の信頼関係の構築, ②共感的コミュニケーションのできるスキルの醸成, ③文化的差異をみつめあった人間関係トレーニングの実施, ④コンフリクト転換の考え方・スキル (Gal-

tung, 2000) の指導など多様なカウンセリング技法を活用しました。

(1) コンフリクト転換の考え方とスキル: トランセンド法

わけでも④のコンフリクト転換の考え方: トランセンド法^{注2)}については, 図 1 に見られるように従来の解決点に加え, 対立する二者の目標を乗り越えた新たな創造的な解決点 (超越点=トランセンド地点) を生み出すことを目指します。このような解決法 (トランセンド法) を生み出すためには, 紛争当事者間の解決ではなく, 第三者, たとえばカウンセラーなどの第三者的立場の介入が求められます。そこで報告者井上は, Galtung (2000) による創造的な方法ののっとり, ①客観的に打ち立てた原理や原則に従って対応する, ②個人の主義や主張, 好みを超えた普遍的な方法を試行錯誤する, ③当事者同士が受け入れられる風土を作る, などの働きかけを行いました。

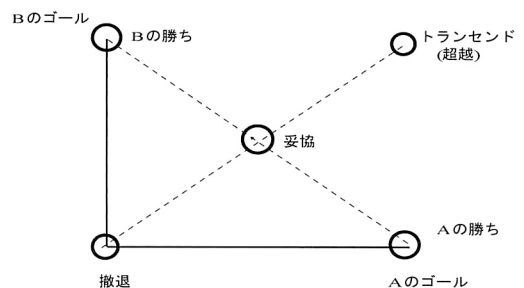


図 1 紛争の 5 つの基本的な結果 (Galtung, 2000)

このトランセンド法の考え方は, コンフリクトを転換し, 和解へ導くという意味においても有効なものでした。和解の 12 の方法 (Galtung: 井上 2005 a) としては, ①言い訳・弁解, ⑦真実和解委員会, ②賠償・補償, ⑧心理劇・追体験, ③謝罪・許し, ⑨共同いやし, ④^{さんげ}懺悔, ⑩共同復興, ⑤裁判・処罰, ⑪共同紛争解決, ⑥因果応報, ⑫ホーボノボノが挙げられますが, 対立者の共通点に焦点を当てる, 友好関係を築く, お互いの潜在的欲求・価値観・ものの見方に焦点を当てて双方に満足のいく結果を導く努力をする, 問題を再構築する, 「われわれ対問題」で「あなた対私」ではないと考える, 代替案を示すなどの方法で和解を目指しました。とくに, ポリネ

表1 マクロ・カウンセリングの14の活動(井上, 2004)

(1) 個別カウンセリング	(8) 情報提供・助言(アドバイス)
(2) 心理療法(サイコセラピー)	(9) 専門家援助(コンサルテーション)
(3) 関係促進(ファシリテーション)	(10) 代弁・権利擁護(アドボカシー)
(4) 専門家組織化(リエゾン/ネットワーク)	(11) 社会変革(ソーシャル・アクション)
(5) 集団活動(グループワーク)	(12) 危機介入(クライシス・インターベンション)
(6) 仲介・媒介(インターメディエーション)	(13) 調整(コーディネーション)
(7) 福祉援助(ケースワーク)	(14) 心理教育(サイコエデュケーション)

シア系青年が船上で船の壁を蹴り大きな穴を空けてしまった事件については、謝罪の仕方や賠償責任の取り方をめぐってアジア圏 vs 西欧圏という文化対立までに問題が大きくなりましたが、⑫のホーボノポノの5段階を経て和解にこぎ着けることができたのは何よりでした。

(2) 包括的なカウンセリング活動: マクロ・カウンセリング

これまで述べてきた船上の個人的から集団的レベルでの異文化間コンフリクトに関しては、①発達の接近、②コミュニティの接近、③多文化的接近という包括的なカウンセリング活動を必要とするものでした。これはマクロ・カウンセリング(井上, 2004)の視点とも考えられます。すなわち、マクロ・カウンセリングにおける3つの共感である、対自的共感、対他的共感、自他的共感に基づく共感的コミュニケーションによる包括的なカウンセリング活動です。特にマクロ・カウンセリング活動においては、多文化共感性の視点を重視し、個人カウンセリングから心理教育までの幅広い14の活動を行います(表1参照)。「世界青年の船」においては個人的な異文化間コンフリクトのみならず文化的和解を必要とするような集団的レベルのコンフリクト解決にも当たる必要があり、まさに14のカウンセリング活動が有効であったと言えます。

以上、「世界青年の船」(1999)は、Celebrating Diversityを基本テーマとして掲げ、互いの文化的違いを乗り越えた青年同士の相互理解と国際平和を標榜したプログラムでした。まさに本シンポジウムの「異文化対立から相互理解」へ至るには、このような青年の異文化体験を核とした実践的プログラムの施行が重要であること、さらにそれを有効なものとするには個人レベルから集団レベルまでの多文化共感性に基づく包括的なマクロ・カウンセリング活動が

有効であったことを報告しました。

注1) PAC分析の理論と技法については『PAC分析実施入門: 「個」を科学する新技法への招待(改訂版)』(内藤哲雄, 2002 ナカニシヤ出版)に詳しい。

注2) Galtung, 2000の理論や技法については、『平和的手段による紛争の転換』(ガルトゥング 伊藤監訳・奥本訳, 2000 平和文化)に詳しい。

文 献

- 井上孝代 2001 『世界青年の船』事業における異文化接触経験への援助に関する実験臨床心理学的研究」平成11・12年度文部省科学研究費補助金報告書(研究代表者: 井上孝代)
- 井上孝代(編) 2004 共感性を育てるカウンセリング 川島書店
- 井上孝代 2005a あのひとと和解する: 仲直りの心理学 集英社新書
- 井上孝代(編) 2005b コンフリクト転換のカウンセリング 川島書店
- 京都YWCA 2003 平和を創る発想術: 紛争から和解へ ほーぼのぼの会 岩波書店(岩波ブックレット No. 603)
- ヨハン・ガルトゥング著/藤田明史(編訳) 安斎育郎・伊藤武彦・奥本京子・中野克彦・西山俊彦訳 2004 ガルトゥング平和学入門 法律文化社
- ヨハン・ガルトゥング著/木戸衛一・藤田明史・小林公司訳 2006 ガルトゥングの平和理論: グローバル化と平和創造 法律文化社

司会(伊藤武彦): 井上先生ありがとうございます。それでは、「日韓における傷ついた関係の修復: 円卓による対話の実践」のテーマに移りたいと思います。伊藤哲司先生よろしくお願ひします。

日韓における傷ついた関係の修復： 円卓シネマによる対話の実践

伊藤 哲司
(茨城大学)

1. はじめに

みなさん、こんにちは。茨城大学の伊藤哲司と申します。今日はこのような場で発表する機会を与えていただき、大変嬉しく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、映画を見てそれをきっかけに対話をするという実践的な試みについての話をします。映画は、それ自体が娯楽の対象でもあります。私たちの人生の中で起こりうる様々な出来事とその体験が織り込まれた文化的なテキストでもあります。映画を鑑賞するということは、そのテキストに描かれている文化を読み解くことに他なりません。そのようにして私たちは、日本映画のみならず、外国映画をも鑑賞し、様々な人々や文化的な営みを知ることができるわけです。

そこにさらに「対話」というプロセスを意識的に組み込むことで、いったい何が見えてくるのでしょうか？ とくに、異なる文化的・社会的背景を持った人同士が同じ映画を見た場合、ある人にとってはすんなりと理解できることが、別の人にはほとんど理解できないということがありえます。同じ場面を感動的だと感じる人もいれば、げっそりすると感じる人もいます。そして映画鑑賞後になぜそのようなズレが生じるのか対話をしてみると、単純にお互いよりよく「解りあえる」ということには必ずしもならず、何が「解りあえない」かが明らかになってしまうこともあります。

しかし、「解りあえない」ことを明らかにすることも、異文化を理解するためには重要です。そもそも文化というものは、私たちが生まれ育つなかで身体に刻み込むようにして身につけていったものに他ならないわけで、質の異なる文化を、そんなに単純に解りあえると考えの方が無理があるからです。「単純に解りあえないことを解りあう」というメタ的な相互理解が必要だと思います。

そのような一歩踏み込んだ相互理解に至るためにはどうしても対話が必要で、対話のためには何か

きっかけが必要です。その格好の題材が映画だというわけです。

私はこれまで、前橋国際大学の山本登志哉さん(註：2008年4月からは早稲田大学)らとともに、このような実践を、いくつかの場所で試みてきました。この実践とその方法を、私たちは「円卓シネマ」と呼んでいます。上下関係のない丸いテーブル(円卓)に座ったつもりになって、対等に話をしようという含意が「円卓」にはあります。今日は主に、2004年に東京で行った円卓シネマでの実践を紹介します。



2. 韓国映画「友へ チング」をめぐる対話

そのときの円卓シネマには、日本人参加者がもっとも多かったものの、その他に、韓国人・中国人・ベトナム人の留学生など、約20人が参加していました。取り上げたのは韓国映画の「友へ チング」(郭キョンテク監督、2001年)。韓国では非常に大きな反響を呼んだ映画であったにもかかわらず、日本では、それほどにはヒットしなかったという映画です。

この映画の舞台は、韓国最大の貿易港・釜山。時代背景となっている1976年から1996年の約20年間は、「漢江の奇跡」とまで呼ばれた高度経済成長期です。主人公は4人の幼なじみ、ジュンソク、ドンソク、サンテクとジュンホ。4人はいつも一緒に、ときにトラブルを引き起こしながら様々な葛藤を経験しつつ成長していきます。大学に入ったサンテクとジュンホが、しばらく会っていなかったドンソクとジュンソクを探すのですが、ドンソクは刑務所にいて、ジュンソクは麻薬中毒になっていました。まも

なくジュンソクはヤクザの父（ジュンソクの父）から組を譲られた男の部下になり、一方、刑務所から出てきたドンスは、敵対する組に入り、2人は決別することになります。2人の溝は深まるばかりで、最終的にドンスはジュンソクの部下に刺され非業の死を遂げます。それでもジュンホはジュンソクを救おうと検察を買収しますが、ジュンソクは法廷で自分の罪をあっさり認めてしまいます。そして、「なぜだ」と問うサンテクにジュンソクは、「ドンスもおれもヤクザだ。ヤクザはかっこよくなきゃだめなんだ」と答えるのです。ラストシーンでは、幼い時代の4人に戻り、古タイヤの浮き輪に乗って海に浮かんだまま、「俺たち遠くに来すぎたよ」とアナウンスが流れます。

一見、ヤクザ同士の単なる殺しあいに見えるこの映画が、韓国では世代を超えて反響を呼び、「これこそチング（親友）だ！」という感動を呼び起こし、旧友を懐かしがって同窓会を行う人たちが増えたとも言われています。日本で販売されたDVDの特典映像には、映画を見た観客の興奮した様子だけでなく、新聞記者や国会議員までもが登場し、この映画を絶賛するのです。殺しあいをするに至った関係なのに、なぜそれでもチングなのか、ほとんどの日本人参加者は、その点については理解できないという反応をしたのでした。

たとえば山本登志哉さんは、「僕の根本的な疑問は、『あれこそチングだ！』と生き生きと感想を言っていた、韓国の若い聴衆のみなさんの反応なのです。DVD版の特典映像にそういうのがいっぱい入っているんですが、それを見て僕はとにかく仰天してしまったわけです。つまりそう感動している彼らにとってはそれこそ究極の友情の姿（のひとつ）であり、その「成就」なんじゃないかしら。でもそこが僕にはなかなか実感しにくい」と述べました。同様に日本人の加納真美さんは、「正直に言うと感動したという感覚が理解しづらく、私自身は嫌悪感すら感じてしまいました。結末を友情とは見ることはできずに、破綻に思えます」と話していますし、ソウルでの生活経験が長い引地達也さんでも、「一般人の目で友情の破綻と見るのは簡単ですが、ヤクザ映画の仁義の成就と見ると非常に納得しやすい」と言います。

一方、韓国人参加者たちの感想は、それらとはず

いぶん質が異なっていました。日本の大学で教鞭を執っている韓国人女性の呉宣兎さんは、「ジュンソクが生き残れば、本当に2人ともヤクザとしてカチマケで終わる普通の破綻だけのヤクザ映画になると思います。なのに、ジュンソクは自らも処刑される道を選ぶことによって、友情を結ぶことになると思います。2人とも『死』の中でしか友情が結ばれない状況・場面設定に視聴者はため息と感動を感じるのではないかと思います」と話したのです。同じく韓国人女性で留学生の金娟鏡さんも、「ジュンソクが生き残れば、本当に2人ともヤクザとしてカチマケで終わる普通の破綻だけのヤクザ映画になると思います。なのに、ジュンソクは自らも処刑される道を選ぶことによって、友情を結ぶことになると思います。2人とも『死』の中でしか友情が結ばれない状況・場面設定に視聴者はため息と感動を感じるのではないかと思います」と述べたのでした。

ここまでくると、私を含めた多くの日本人参加者は、何とか頭では理解しようと努めつつも、ワケがわからなくなってしまうわけです。そしてさらに対話をしていく中で、どうやらこの映画を「理解」するためには、韓国の人たちが共通して有しているとされる「恨（ハン）」に言及することは避けられないということになっていきました。ただしこの恨、日本語の「恨む」とは、どうやら根本的に異なっているようです。「恨む」は、「うらめしや〜」という幽霊が呟くとされる決まり文句から窺われるように、特定の人物がいて、それへのあからさまな憎悪を含んでいるわけですが、「恨」はどうも違うらしい。それについて、上記の山本さん・呉さんと、さらに北京師範大学に務める女性教員で朝鮮族中国人の姜さんも含めて、こんなやりとりを交わしました。

姜：私はこの映画のベースとして、背景として恨があるのだと理解しました。

呉：恨は時代背景として位置づける方が、むしろ自然な気がする。映画のストーリーそのものに恨を結びつけようとすると、やや無理やりという感じになるんですよね。

山本：うーん、むづかしい。よくわかんないんだけど、じゃあたとえば『冬のソナタ』なんかにも背景に恨が流れているんですか？

姜：それは違うと思う。（中略）冬ソナは個人的

な話ですね。本当に時代背景があまり出てこないドラマは韓国では珍しいほうですね。(中略)

山本: そうすると、恨が底流にある『チング』は日本人にはピンとこなくて、それが出てこない『冬ソナ』には感動できる、っていうわけなのかなあ。

伊藤: 『冬ソナ』は当地韓国では、そんなに大ヒットしたというわけではないようですね。何だか皮肉な話だなあ。

結局、日本人の山本さんと私が、恨への理解から取り残されてしまったというわけです。それでも対話をしてわかったことは、「恨は自分たち日本人には簡単に理解できそうにもない」ということであり、呉さんや姜さんにとってわかったことは、「恨は日本人には簡単にわかってもらえそうにない」ということでした。しかしだからといって、これが円卓シネマによる対話の失敗ということではなく、先にも書いたように、こういう点に達することそのものが、円卓シネマの目指すところでもあるというわけです。それによって私たちはとりあえず仲良くなれるし、このような対話が、さらに次なる対話を生み出していくのです。

3. 円卓シネマの展開

こうした円卓シネマの実践をまとめて、山本さんと私が編者となり、『アジア映画をアジアの人々と愉しむ: 円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界』(北大路書房, 2005年)という本を出版しました。この本には、「友へ チング」の他に、日本映画の「Shall we ダンス?」(周防正行監督, 1996年)、中国映画の「あの子を探して」(張藝謀監督, 1999年)、ベトナム映画の「ニャム」(ダン・ニャット・ミン監督, 1995年)も取り上げ、全部で59人が執筆に関わりました。日本人がもっとも多いのですが、韓国人・中国人・ベトナム人の執筆者もあり、また大学教員や留学生を含む院生・学生が多いものの、できるだけ幅広い人に執筆参加してもらいました。この本の帯には、「せめぎあうアジア、わかりあうアジア」とあり、さらに続けて「日韓中越の59人の対話から、こんな本ができた! 心理学者が考えた多文化共生の新しい「遊び方」と書かれて



あります。この円卓シネマの方法は、目配りができるコーディネーターは必要ですが、きわめて簡便であり、それでいて大きな効果を生み出しうることを私たちは見出したのでした。北大路書房の編集者である関一明さんは、「新たな平和戦略の本」と評しています。

この本の内容の次なる展開として2007年3月に、今度は舞台をソウルに移して、そこで韓国の人たちのより多くの参加を得て、日本と韓国の歴史的な「傷ついた関係」、その修復がいかに可能かということを念頭に置きながら、再び円卓シネマの実践を行いました。そのときは、日本映画の名作「東京物語」(小津安二郎監督, 1953年)、恨とパンソリを描いた韓国映画の「風の丘を越えて」(林權澤監督, 1993年)、それに日韓共同制作のドキュメンタリー映画「あんにょん・サヨナラ」(金兌鎰監督, 2006年)を取り上げ、また興味深い対話が繰り広げられました。そのときも参加者は大学教員と大学院生・学生が多かったのですが、中には、靖国問題を描いた「あんにょん・サヨナラ」の主人公である李熙子さんも参加してくれていました。このときの参加者が中心になって執筆した本の出版も目指しており、今度は日本語と韓国語で同時出版できるようにと計画しています。

また、つい先日(2007年11月10日)に、韓国の



済州島で日本平和学会の大会が行われ、そこでも私は、「あんにょん・サヨナラ」を取り上げての円卓シネマを実践してみました。ソウルでの円卓シネマにも参加してくれていたソウル市立大学的女子学生・河允熙さんにも参加してもらいました(写真左下が、筆者と河允熙さん。済州大学校にて)。参加人数は多くはありませんでしたが、この方法とその実践が、平和教育の中でも有効に使えるということを、参加者の人たちと共通して理解することができました。

この映画は、父親を日本兵として徴用され、父親の顔も知らないまま死に別れ、その父が知らない間に靖国神社に神として祀られていたという李熙子さんと、阪神淡路大震災をきっかけに知りあった彼女をサポートする日本人・古川雅基さんを描いたドキュメンタリーで、どのような立場であれ知らないではすまされない靖国問題を考えさせるものです。この映画を日本人とともに鑑賞した女子学生の河允熙さんは、次のように書きました。

この映画が私にどのように思考の転換をもたらすことができたのかということについて考えてみた。わたしの苦悶は、いつも学んだ通りにだけ、政治的にだけ眺めたために同じ場所でぐるぐる回ったのではないだろうか？ 問題の始まりは政治的であり、歴史的に始まったからと

いって、その最後もまた政治的に解決することではない。国家レベルの問題ではあるが、個人レベルの問題でもあるからだ。個人と個人の間に発生するいろいろな問題の中から解決出来ないことはかれらの疎通がなくて、すなわち対話が出来ないためではないだろうか？ いや、互いの問題が何であるかでさえ考える余裕を持てなかったのではないだろうか？ ということを考えてみた。これは太平洋戦争の日本の英雄に対し靖国神社で参拝する一つの事件の状況を、ただ表面に表れた現象だけを眺めて、疎通しないようにするならば、それは日本、韓国両国すべてにとって消耗的な戦闘となるだけである。

これに対して、日本人の若手研究者である奥田雄一郎さんは、ある面では対照的に、ある面では響きあうように、次のように書いています。

遠い、あまりにも遠い、それが今回の論点に対する私の率直な感想である。正直に言うと、今回の論点は非常に難しいものであった。いや、筆者だけではなく、今回の論点は筆者と同世代である日本の者たちにとっても非常に難しい問いであるだろう。なぜなら、日本において、我々の世代の多くの者にとっては「戦争」とは

歴史の教科書に出てくるものであっても、我々の生活の中に身近に感じられるものではないし、同様に、「民族」というカテゴリーにリアリティを感じる者もまた、少ないと言わざるを得ない。(中略)……筆者もまた、被害者にも、加害者にも、傍観者にも、そして当然のことながら戦争の当事者の立場にもなれず、宙ぶらりんの立場でもがき続けている。つまり、我々の世代にとっての困難とは、戦争という問題に対する「参加者となることの困難さ」である。しかし筆者にはもがき続けることしかできない。今、目の前の現実には立ちすくみ、ただただそこに生きることにしか。しかしながら、我々はそのような歴史の上に生きるしかない。戦争の歴史というこれまでの時間軸の上に生きつつ、今、現在起こっているアクチュアルな問題に立ち向かっていくしかない。それができるのは、今を生きる我々しかないのだから。

こうしたそれぞれの意見からまたさらにどんな対話が紡ぎだされていくのか、それを丁寧を追ってみたいものだと思っています。

4. おわりに

歴史認識問題のような重たい問題を、いきなり面と向かって話しあうというのは、さすがに気が重く、こうした問題に真摯に取り組むことが重要だと考える人にとっても、なかなか気が進むことではないのではないのでしょうか。しかし、映画を媒介とすると、とりあえず映画についての感想や意見を述べればいいわけで、そうすることには、さほど抵抗はないでしょう。映画を使えば、そのようにして言葉を繋いで対話を作っていくことは、そんなに難しいことではないと思います。それでいて、映画は最初に述べたように文化的なテキストであり、ライフ(人生・生活・命……)が描かれていたりするものですから、それをめぐる対話は、けっして浅いものにはならないのです。

終戦から60年以上が経過したというのに、今でも歴史認識問題が日韓の間に存在し、傷ついた関係がなお修復されないまま、そのままにされているという現実があります。しかしこれは、単に日本側が謝罪すればすむという問題ではないように私には感

じられます。やはりそこには、お互いに対する理解と同時に、お互いに何が解りあえないのかについての理解が必要です。それを促すのが、円卓シネマの方法であり実践なのです。

歴史認識問題が存在するのは、もちろん日韓関係だけではなくありません。本当に根の深い、解決が容易ではない問題です。しかし個人でも、ささやかにその問題に立ち向かっていくことはできますし、ささやかにそれを変えていくこともできるでしょう。

私としては日韓だけでなく、日中や日越といった関係の中でも、さらに円卓シネマの展開をはかっていければと考えています。円卓シネマは簡便な方法ですから、今日話を聞いていただいたみなさんにも、ぜひどこかで実践してみただけいただければと思います。そしてできれば、その実践の結果を聞かせていただけたなら嬉しく思います。

本日このようなお話しさせていただく機会を与えていただいたことに、あらためて感謝します。ご静聴ありがとうございました。

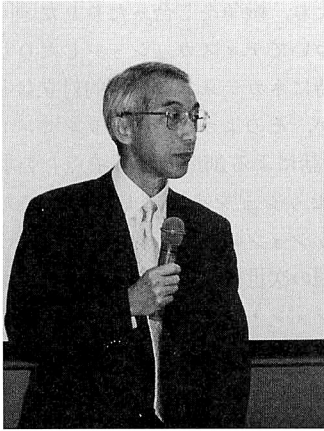
司会(伊藤武彦): 伊藤哲司先生ありがとうございました。以上で、2つの話題提供が終わりましたので、指定討論者からのコメントに移りたいと思います。大淵憲一先生よろしくお願いします。

■指定討論者のコメント

異文化間葛藤の解決に向けて： 共感性と不可知の尊重 大淵憲一

私が属している社会心理学分野では、9.11以降、とみに異文化間葛藤の研究が盛んになりました。その多くは理論面の強い実験的研究です。それらの研究を通して、他集団に対する偏見やステレオタイプ、集団間の敵意と攻撃性の仕組みがかなり明らかになってきました。中には従来の常識を覆すような知見もあり、その発展は目を見張るばかりといっても過言ではないでしょう。その結果、他集団に対する人々の敵意や偏見をどのように低減させるか、つまり、集団間葛藤の解決についても有益な示唆と提言が積み重ねられています。

しかし、こうした社会心理学の研究にも批判があります。それは現場的でないという批判です。研究



の多くは大学生を対象に、大学の実験室で行われたものです。そこで得られた知見や理論が無意味だというわけでないにしても、歴史的背景とか現実的利害が入り組んだ実際の異文化紛争の理解や解決に、それらがどれくらい貢献できるかは未知数であるという批判です。確かに、異文化紛争の現場に向かう社会心理学者が少なかったのも事実です。

そうした中であっても、最近、現実の集団間紛争を扱う社会心理学者も少しずつ増えてきました。例えば、アイルランド紛争の当事者たちを対象に和解プロセスを分析している Oxford 大学の Hewstone たちの研究などがあります。しかし、そうした研究結果が示す事実は、現実の紛争を和解プロセスに乗せることがいかに困難であるかということでした。各異文化葛藤に固有のしこりがあり、それを社会心理学的に説明することは可能であっても、これを氷解させることは容易ではないようです。

ただいま井上先生と伊藤(哲)先生からお話しいただきましたが、これはいずれも、現実の異文化葛藤の理解と解決に向けたそれぞれユニークな試みを述べたものでした。井上先生は、ご発表の中で Gal-tung の和解の 12 の方法やマクロ・カウンセリング 14 の活動についてご紹介くださいました。また、「世界青年の船」の中で生じた様々の異文化葛藤に、仲介者としてこれらを適用した経験を話されました。井上先生のお話は、異文化葛藤の解決に「これさえやっていればよい」という万能薬のようなものはない、ということであろうと私は思います。個々の紛争独自の構造を理解し、それに合った和解の方法を工夫することが大切です。和解手段を考案し、

これを試行するとき、異文化葛藤に関する心理学の理論と知識が役に立ちますが、それだけでは有効ではありません。井上先生が最も強調したいことは、和解を仲介するものの臨床家的共感性だったと思います。

伊藤(哲)先生がお話になった円卓シネマによる対話は非常に興味深いもので、異文化理解のためのまさしくユニークな試みと言えそうです。その中で、朝鮮・韓国の人たちの「恨」は、日本人には本当には分からないだろうというお話がありますが、確かに、例に挙げられた映画に即して考えても、私にはぴんと来ませんでした。結局、伊藤(哲)先生がおっしゃりたいことは、異文化理解とは、「互いに、どうしても分かり合えないことがある」ということを理解するところから始まるということなのではないでしょうか。理解するということは自分の枠組みで相手を見ることだとも言えます。既存の社会心理学理論によれば、「分からない」ということは不安と警戒心を喚起するはずですが、しかし、不可知であることは逆に畏敬と尊重を生み出すものであるかも知れません。

井上先生が強調する共感性と伊藤(哲)先生から示唆された不可知なるものの尊重、これらは一見正反対のもののようですが、私には異文化葛藤に対する同じ精神的構えの表現と思われました。

■質疑応答

司会(伊藤武彦): 長時間に及ぶ話題提供と指定討論をありがとうございました。すでに終了時刻を経過しておりますが、1, 2 件ほど質疑をお願いしたいと思います。

< 質疑 > (内藤哲雄)

話題提供の井上先生と伊藤(哲)先生のお話しは、それぞれの手法が違うにもかかわらず、具体的でわかりやすいもので、それらの効果や意義についても理解できました。また、大淵先生のコメントで、異文化理解における実践とその研究の価値について、また両技法での「理解し合うこと」「理解できないことの理解の共有」は表裏であり、共通していることの説明もわかりやすいものでした。

ところで、井上先生への質疑なのですが、青年の船の家での交流は、集団として交流を含むとはいっ

でも、対人交流に基づくものであるといえます。ターナーの〈自己カテゴリー化理論〉などでは、対人交流での相手への肯定的感情や評価は、その人々がサブカテゴリー化されるなどして、必ずしも集団のカテゴリー全体に及ばないことが指摘されています。「世界青年の船」(1999)において、交流の影響が国家や国民、民族などの全体にまで及んだのでしょうか？ その効果を予測しての工夫があったのでしょうか？



< 応答 > (井上孝代)

ご指摘の点については確かにたいへん難しい課題であると船上においても実感しました。

工夫といえば、トランセンド法の考え方により、国と国の対立というベクトルにとどまらず、それを超越した「新しい世紀の地球人をめざそう」という働きかけを行いました。たとえば、船には歴史的に

占領されたり、戦争をし合ったりした国同士が一緒に平和についてディスカッションしたりします。そのため、時にネガティブな感情的対立なども認められましたが、そのような時にトランセンド法による「共感的対話による創造的な解決点」を求めていけるようにセッションを実施しました。ある日長いディスカッションの後で、船内の大広間の天井から各自、各国の次世代への平和メッセージが次々に掲げられ、ジョン・レノンの“Peace”の歌を全員で合唱するに至ったことがありました。



■付記 最後に司会の内藤から、話題提供者、指定討論者、最後まで傾聴していただいたフロアーのみなさんに謝辞が述べられた。

(文責：内藤哲雄)